

1900-1910年代のゴーリキーにおける世界—宇宙像

中村唯史

1.

マクシム・ゴーリキー(1868-1936)の作品には、その初期から一貫して、太陽のモチーフが頻出している。たとえば『イセルギリ婆さん』(1894)が語る説話の主人公ダンコが、闇の中で絶望する一族に進路を示すために自分の胸から抉り出して掲げた心臓は、「太陽と同じくらい明るく、いや太陽よりももっと明るく燃えていた」と形容されている。¹『二十六人の男と一人の女』(1899)では、労働に押しつぶされそうな日々を生きる26人のパン職人の思いが、「太陽を失ってしまっただけはいるが、なお生きている人間たちの愁い」と表現され、彼らが敬愛する少女は「太陽の代わり」と呼ばれている。²

作品テキストを離れても、たとえば、後に戯曲『どん底』(1902初演)に結実する構想の終幕について、ゴーリキーが「春が、太陽がおとずれ、自然が生氣を取り戻し、木賃宿の住人たちは悪臭のこもった雰囲気の中から新鮮な大気のなかへ、土工の仕事に出て行った。彼らは歌をうたい、そして太陽のもとで、新鮮な大気のなかで、おたがい同士の憎悪を忘れていった」と説明したとの回想が残っている。³ 作品の内と外とを問わず、ゴーリキーにはこのような例がきわめて多い。太陽が彼にとって、若い頃から特権的な形象だったことは疑いない。

ただし、ゴーリキーがいわゆる民衆出の作家だったからと言って、その太陽モチーフと「民衆の神話的想像力」「スラヴ神話のアーキタイプ」とを直結させることには、慎重でなければならない。⁴ というのも、ゴーリキーの「太陽」の使い方は、いつも同じだったわけではないからだ。とりわけ顕著な変化は、1900年代半ばに生じている。それまでの作品では、あるべき良き生の象徴として、概して部分的・比喩的に用いら

¹ Горький М. Собрание сочинений в тридцати томах. [以下—ССТ] Том 1: Повести, рассказы, стихи 1892-1894. М., 1949. С. 356. 日本語訳は上田進、横田瑞穂訳編『ゴーリキー短編集』岩波文庫、1966年、56頁に拠る。なお本稿の日本語訳は、特に言及がない場合は、著者による。

² ССТ. Том 4: Повести, очерки, рассказы 1899-1900. М., 1950. С. 281. 日本語訳は『二十六人の男と一人の女: ゴーリキー傑作選』(中村唯史訳)光文社古典新訳文庫、2019年、12-13頁。

³ Станиславский. К.С. Моя жизнь в искусстве. М., 1962. С. 312. 日本語訳はスタニスラフスキー(蔵原惟人・江川卓訳)『芸術におけるわが生涯(中)』岩波文庫、2008年、257-258頁に拠る。

⁴ そのような一例として、Спиридонова Л. М. Горький: новый взгляд. М., 2004. С. 185-186.

れていた「太陽」だが、1900年代半ばからは、作品構造の基底となっている場合が多いのである。

たとえば1912年末に発表され、1915年に連作短篇集の一篇として『ルーシを巡りて』に収録された『グービン』では、太陽はほとんどいつも森林火災の煙にさえぎられている。雲という「とぼり」による天上の神と地上の人間との断絶を基本的な構造とする旧約聖書「ヨブ記」との関連が、いくつかの記述やディテールで示唆されているこの短篇において、ほとんどの人物は本来あるべき生の象徴としての太陽から切り離されている。ただし、したたかな生命力と母性的な愛を秘めた女性ナデージダと、より良き生への意志を失っていない語り手だけは、森林火災の煙という「とぼり」を突破して、空からそそぐ陽光に祝福のように照らされたり、太陽に類する「昼の星」を目にしたりする。1890年代の作品では局所的・比喩的だった太陽の象徴性が、『グービン』では全篇一貫して機能し、作品世界を規定しているのである。⁵

ところで、このような変化が起きた時期は、ゴーリキーがアレクサンドル・ボグダーノフ(1873-1928)やアナトーリー・ルナチャルスキー(1875-1933)らとボリシェヴィキ内の分派を形成し、「集団主義」や「建神論」を提唱していた時期⁶、そして後述のように、彼の言説にコスミズム的な傾向が表れていた時期と重なっている。私たちは、太陽を核とする1900～1910年代のゴーリキーの世界像を、同時代の文脈のなかで考えてみる必要がある。

2.

もっとも、太陽のモチーフの頻出は、ゴーリキー固有の現象ではない。彼よりも先行して、あるいはほぼ同時期に「太陽」を自分の重要モチーフとして用いていた文学者にコンスタンチン・バリモント(1867-1942)、ヴァレリー・ブリュソフ(1873-1924)、アンドレイ・ベールイ(1880-1934)などを挙げる事ができるし⁷、生の源泉の象徴として太陽を用いた例は、19世紀末から1900年代にかけて、むしろ多い。⁸

ソ連期の研究者L. ドルゴポロフは、19世紀末～20世紀初頭のロシア文学における

⁵ 短篇『グービン』の詳細については、中村唯史「ゴーリキーの短篇『グービン』の空間構造」『ユーラシア研究』(ユーラシア研究所編、群像社)60号、2019年、30-40頁を参照されたい。

⁶ ただしボグダーノフは、公式に建神派だったことはない。Никитин Е. Н. «Исповедь» М. Горького. Новое чтение. М., 2000. С. 65.

⁷ Муратова. К. Д. М. Горький на Капри 1911-1913. Л., 1971. С. 244.

⁸ Долгополов. Л. К. М. Горький и проблема «Детей солнца» (1900-е гг.) // Максим Горький: pro et contra. СПб., 2018. С. 454-455.

太陽の形象の興隆が、19世紀後半の自然科学が地上の生命の発展に果たす太陽エネルギーの役割に着目したことの影響であるとの見解を示したうえで、特に「生の源泉としての太陽」というイメージの確立と普及にロシアで寄与したのは、宇宙や気候に関する科学啓蒙書を書いたドイツの文筆家ヘルマン・クライン（1844-1914）の『天文学夜話』（独語原本 1890年刊）露語訳（«Астрономические вечера»）だったと指摘している。

人類の精神の主要な産物——科学的な発見、宗教的・哲学的体系、このうえなく美しい詩、旋律、絵画、彫刻、寺院——を、人間の知性と創造力と意志によって創られている一切を思い出そう。こうしたすべての達成は、幾千年にも及ぶ、たゆみない精神的な労苦を必要としたのだが、そのための力は太陽によって与えられてきたのである。ラファエロがシスターナの聖母を描いていたとき、ニュートンが万有引力の法則について思考していたとき、スピノザが『エチカ』を、ゲーテが『ファウスト』を書いていたとき、彼らのなかでは太陽が作用していた。私たちは——天才も凡人も、強者も弱者も、皇帝も乞食も——皆、太陽の子どもなのだ。⁹

『天文学夜話』露語訳は、1895年にハリコフで、1898年にモスクワとペテルブルグで刊行されるなどして多くの読者を獲得したが、この本が19世紀末～20世紀初のロシアで迎えられた理由のひとつは、太陽を初めとする天体と地上の人間とのあいだに有機的な紐帯を見るその世界像が、自然と人間の照応を基本とする「ロシア的自然観」の確立直後である19世紀末の読者にとって、¹⁰ あらかじめ親しみやすいものだったことに求められよう。加えて、太陽が地上の生命一切の、さらには人間の精神の源泉であるかのような『天文学夜話』の記述は、フランスの研究者ミシェル・ニキョーが間接的に指摘しているように、¹¹ 東方正教会の伝統的な教説である「神のエネルゲイア」の説とも相同的だった。

聖グレゴリオス・パラマス（1296-1359）らの「神のエネルゲイア」の教説とは、神そのものは不可知の次元にあるが、ひとは神から発するエネルゲイアには接している

⁹ 引用は Там же. С. 456. に拠る。

¹⁰ 歴史的—社会的形成物としての「ロシア的自然観」の成立過程については、Christopher Ely. *This Meager Nature: Landscape and National Identity in Imperial Russia* (Dekalb: Northern Illinois University Press, 2002) を参照されたい。

¹¹ Никё М. «Психофизическая» утопия М. Горького: энергетизм как научно-философская составляющая Серебряного века. // Максим Горький: pro et contra. С. 171.

というものである。「神の側から言うと、神は自らのうちに完全にとどまりつつも、私たち〔人間〕の内部に遍く住んで、ご自身の本性ではないが、その栄光と輝きを私たちに分与」している。¹² この「エネルギー」は、「マタイ福音書」第17章で山上のイエスと弟子たちを覆った「光れる雲」などを典拠として、伝統的に「光」とのアナロジーで語られてきた。¹³ 『天文学夜話』が強調した「人間の精神を含む生の源泉としての太陽」は、なおもこの教説が作り出したパラダイムの内にあった当時の一般的な読者にとっても、またナロードニキ運動等の崩壊後、宗教的・神秘的な傾向を強めていた知識層にとっても受容しやすい形象だったのである。

だが、だからと言って、東方正教会のこの教説が「生の源泉としての太陽」の起源だったと考えるのは適切ではない。影響という現象における受容側の主体性を等閑視し、原因と帰結をさかしまに捉える結果になってしまうからだ。

社会変革の理想が破綻した後の当時のロシアでは、一切が互に通底し、矛盾なく調和している全一的な世界像への希求が高まっており、クラインの『天文学夜話』や東方正教会の教説は、むしろこの希求を具体的に語り、可視化する必要から、受容されたり想起されたりしたのである。全一的世界像の源泉と言うよりも帰結なのだ。ヴラジーミル・ソロヴィヨフ（1853-1900）の神人説や、ロシアでは特に1900年代から注目されたアンリ・ベルクソン（1859-1941）の哲学¹⁴ などについても、同じことが言える。

もちろん、導入されたこれらの思潮が翻って、起点たる全一的世界観に逆に影響を及ぼした面もある。概して19世紀末～20世紀初頭のロシアの思想状況は、全一的世界像の表出をめぐって古今東西の諸思潮がさかんに召喚され、相互に作用し合うなかから、宗教的・哲学的・科学的・感覚的等々の文脈に沿った言説、これらの文脈を融合したり比喩的・類推的に用いたりした言説が生成してくるといって、きわめて多元的・重層的・動的な過程だった。私たちがなすべきは、この時期の理念や形象の淵源の「特定」ではなく、諸思潮が当時の言説の中でどのように相関していたかを具体的にみることである。

¹² 御子柴道夫『ロシア宗教思想史』成文社、2003年、34頁。

¹³ 本段落の記述は、御子柴道夫『ロシア宗教思想史』、16-45頁；*Лосский В. Н. Очерк мистического богославия восточной церкви. М., 1991. Глава IV. Нетварные энергии.* [orthodox.ce/books/lossk1/Main.htm] (2019年9月3日閲覧)などを参考している。

¹⁴ ロシアにおけるベルクソン哲学の受容については Hilarly L. Fink. *Bergson and Russian Modernism 1900-1930* (Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1999); *Франсис Нэтеркотт. Философская встреча: Бергсон в России (1907-1917). М., 2008.* 等を参照されたい。

3.

さて、以上の前提に立つて言うと、ゴーリキーの作品における「太陽」の機能の変化には、クライン『天文学夜話』の直接の「影響」が認められる。ゴーリキーは1903年10月26日付の手紙で、K. ピャトニツキーに「アンドレーエフと一緒に『天文学者』という戯曲を書くつもりです。レオニード [アンドレーエフ] は、クラインから靈感を得た結果、卑小で灰色の日常の真っ只中で全宇宙の生を生きている人間を描こうとしています」と伝えている。¹⁵ この共作は最終的には実現せず、ゴーリキーは2年後にアンドレーエフとは別個に戯曲『太陽の子ども』(1905)を書き上げているが、そこには『天文学夜話』との明らかな呼応が指摘できる。

プロターソフ [...] かつて、ちっぽけで形もないタンパク質のかけらが、太陽の光線の下で燃えあがり、生命を得た。それは増殖し、複雑化して、驚やライオンや人間になった。やがて私たち人間から、すべての人々の中から、人類という壮大で整然とした有機体が生まれるだろう。諸君、人類が生まれるのだ！

プロターソフ [...] 私たちは太陽の子どもなのだ。輝く生の源である太陽によって生み出された私たちは、暗い死の恐怖にも打ち勝つだろう！ 私たちは太陽の子どもだ！ 太陽は私たちの血の中で燃えている。太陽は私たちの蒙昧の闇を照らし、誇り高く、炎のような思想を生む。太陽はエネルギーと美と、魂を酔わせる歓喜の海だ！¹⁶

これらの生硬なセリフが、その文学性は措くとして、『天文学的夜話』のパラフレーズであることは明かだろう。¹⁷ もっとも、主人公プロターソフの夢はやがて挫折し、戯曲は「何かの悪しき眼のように、灼熱のまなざしで、黙って空から見ている」¹⁸ 太陽のイメージのうちに幕を閉じているのではあるが、『太陽の子ども』は、題名と構造によって「太陽」が全篇を規定しているゴーリキー最初の作品のひとつである。¹⁹

『天文学的夜話』の記述のゴーリキーへの「影響」は、さらに1908年の論考『個の

¹⁵ ССТ. Том 28: Письма, телеграммы, надписи 1889-1906. М., 1954. С. 292-293.

¹⁶ ССТ. Том 6: Пьесы 1901-1906. М., 1950. С. 325, 326.

¹⁷ 本稿の『太陽の子どもたち』と『天文学夜話』の関連についての記述は、Долгополов. М. Горький и проблема «Детей солнца» (1900-е гг.). С. 470-480. から多くの示唆を得ている。

¹⁸ ССТ. Том 6. С. 374.

¹⁹ ゴーリキーが『天文学夜話』を1903年10月の時点で読んでいたことは、本節冒頭で引用した手紙の記述から確実だが、それ以前に彼がクラインの説を、たとえ間接的にでも知った時期がいつなのかは、特定されていない。

破壊』にも及んでいる。この論考の要旨は次のようなものだ。古来、神話や叙事詩の歌い手は、全民衆の集団的創造と結びついていた。人類最初期の「個」は、集団からエネルギーを受けていたので、自分の周りに空虚を感じるはずもなかった。

ミルトンとダンテ、ミツケーヴィチ、ゲーテとシラーが最も高みに昇ったのは、集団の創造に鼓舞されたとき、測りようもないほどに深淵で、限りなく多様で力強く、聡明な民衆の詩想という源泉から、靈感を汲み得たときであった。²⁰

けれども「個」は、歴史が進行するにつれて集団との乖離をしだいに強め、現在では不安と憂鬱に苛まれている。そのような「個」が、かつて民衆が集団的に創造したプロメテウスやウィリアム・テルのような、美と力に満ちた詩的形象を生み出せるはずもない。今日では「個」は、精神の領域で、反動的なものとなっている。

そのような中で注目すべきは、「資本主義の鉄の手が、プロレタリアートを締め上げることで、自分でも意識しないうちに、彼らを心理的に全一なる力と化し、再び集団を創出しつつある」²¹ ことだ。現時点での私たちの課題は「世界の生ける、意識的で能動的な精神物理学的エネルギーの恒常的な発展に配慮し」、「民衆のエネルギーの全蓄積を可能なかぎり発達させ、組織して、これを能動的な力と化し、階級的、群的、党派的な集団性を創りだすことである」。²²

『個の破壊』は、ゴリキーが深く関与していたズナーニエ社から1909年に出版された論集『集団主義の哲学』に、ボグダーノフやルナチャルスキーらの論考とともに収録された。「古い文化の世界——その秩序と搾取の機構全体が根底から動揺し始めている」との現状認識の下、「階級としてのプロレタリアートの世界観（それは未来の社会における全人類的イデオロギーの胚子だ）としての本質的な集団主義、行動と認識の完全かつ決定的な集団主義」²³ を提唱する無記名の序文を持つこの論集において、『個の破壊』の主張は明確だ。社会主義は、「個」への分岐から「集団」性へと回帰する歴史上の一大転換点である。集団から乖離した「個」に依拠する度合いが深まるにつれて人間の創造が枯渇したことからも見ても、この転換は不可欠であり、その下地は資本主義的な大工場の出現によってすでに準備されつつあるというのである。

『個の破壊』で特に注目に値するのは、民衆という集団の詩想こそが、ミルトン、

²⁰ ССТ. Том 24: Статьи, речи, приветствия 1907-1928. М., 1953. С. 33-34.

²¹ Там же. С.37

²² Там же. С.79.

²³ От редакції // Очерки філософії колективізму. СПб, 1909. С. 3, 5.

ダンテ、ゲーテといった文学史上の巨人の創造の源泉だったという主張だろう。これは第2節で引用した、人間の偉大な創造や発見の源泉が太陽であるという『天文学夜話』の記述と相通的である。ただし「太陽」の位置に「民衆」が置かれている。

このような「太陽」と「民衆」とのアナロジーは、この時期のゴーリキーの言説に頻出している。一例として、1906-1907年執筆の長篇『母』第7章の記述。

私たちは皆、同じ母親——地上の万国の労働者大衆が兄弟であるという抑えがたい思想——の子どもなのだ。それは私たちを暖めてくれる。それは公正という空に見える太陽であり、この空は労働者の心の中にある。[...] それ[この信念]を目の当たりにした母[主人公]は、空の太陽のように偉大で輝かしい何かが本当に世界に生まれたことを、そしてそれを自分がいま目にしているを感じないわけにはいかなかった。²⁴

この記述の「太陽—民衆=集団」のアナロジーには、先に言及したエネルゲイアの連想も感じ取れる(太陽は私たちを「暖めてくれ」、私たちの「心の中にある」)。後のプロレタリア文学の元型である『母』に、実はキリスト教的コノテーションが少なくないことは、これまでも多くの評家によって指摘されてきたところである。²⁵

ただしそれは、「嵐の告知者」ゴーリキーが、実はキリスト教の信仰を内に秘めていたということでは、まったくない。彼は人間には宗教的な感情が不可欠であり、そのために崇敬の対象が必要であると確信していたが、その対象は既存の神ではなく、人間がこれから創出する未成の理想——「太陽」をその象徴とする、未来における集団的身体としての民衆自身(『太陽の子ども』でプロタソフの言う「人類という壮大で整然とした有機体」)でなければならなかった。

建神論は神の不在を前提とした無神論だが、そのことは、ゴーリキーが思考し、表現する際に、『天文学夜話』や東方正教会の教説他からの形象や図式を用いることの妨げにはならなかった。彼にとってかけがえのないものが信仰の対象ではなく、その対象に対して人間が抱く宗教的な感情とその流露の方だったからである。建神論に立脚して書かれた『懺悔』(1908)他には、確かにキリスト教的なイメージが頻出しているけれども、それらはあくまでも作中人物の宗教的感情そのものを伝えることを目的としている。

²⁴ ССТ. Том 7: Повсети, рассказы, очерки, наброски 1906-1907. М., 1950. С. 222.

²⁵ その一例として *Стиридонова Л. М. Горький: новый взгляд.* С. 64-89.

4.

1900年代半ば以降のゴーリキーの言説には、未来における「集団としての民衆」という理想が「太陽」に擬えられ、その実現への志向や信念が「光」に喩えられる体系的な記述が多数認められるが、これはゴーリキーがルナチャルスキーやボグダーノフらとボリシェヴィキ内の分派を形成し、集団主義や建神論を提唱していた時期と重なっている。ゴーリキーは1907年11月のR. アブラーモフ宛書簡で「ルナチャルスキーとは毎週会っています。[...] 彼とボグダーノフは、私にとって偶像です。この二人ほどに、誰かに惹きつけられたことは、これまでありません」と書いている。²⁶

もっとも、カプリ島に集ってレーニンと論争したり、論集『集団主義の哲学』を発行したりした1908年～1909年を蜜月の頂点として、ゴーリキーとボグダーノフの人間関係は、翌1910年には決裂している。²⁷ だがその一方で、『唯物論と経験批判論』によるヴラジーミル・レーニン(1870-1924)の批判(1909)の後も、²⁸ ゴーリキーが建神論の立場を保持していたことは、1913年10月末のゴーリキーの論考の読了直後に、レーニンが書いた憤怒の手紙からもうかがえるのである。

親愛なる A.M. [ゴーリキー] ! [...] あなたが求神論に反対なのは、それを建神論に取り替えるために過ぎないのですか!! あなたからこんな代物が出てくるなんて、これをいったいおぞましいと言わずに何と言えましょう。建神論と求神論の違いなんて [...] 悪魔が黄色いか青いかくらの違いでしかありません。[...] これはいったい何です? あなたご自身が肯定していない『懺悔』の残滓ですか?? それともその餌でしょうか?? [...] ひどく腹立たしい。あなたの V.I. [レーニン] ²⁹

事実、ゴーリキーが1900年代後半に確立した世界像の表現体系は、1912年から1913年にかけて書かれ、1915年に『ルーシを巡りて』にまとめられた諸短篇にも認められる。本稿第1節で指摘したように、『グービン』が「ヨブ記」を下敷きにして、生命力やより良き世界への希求をなお保っている者にのみ太陽他の天体が顕現する構造に

²⁶ Никитин Е. Н. «Исповедь» М. Горького. С. 73 に拠る。

²⁷ Семенова. А. Л. Влияние эмпириомонистических идей А. Богданова на М. Горького // Максим Горький: pro et contra. С. 185-186.

²⁸ ただしレーニンは、国際的に著名な作家に対する戦略的な配慮からか、『唯物論と経験批判論』ではゴーリキーへの直接の批判を避け、個人的な文通の維持にも努めている。

²⁹ Ленин В. И. Полное собрание сочинений. Издание пятое. Том. 48: Письма ноябрь 1910-июль 1914. М., 1970. С. 226-228. もっともレーニンは続く書簡で、憤怒に駆られて手紙を書いたことの非礼は詫びている。Там же. С. 230.

なっていることはその一例だが、建神論的な詩学は『汽船にて』中の次の描写にも見て取れる。

剣のかたちをした最初の光線が扇のように開き、その先端は目も眩むばかりに白かった。銀の鐘の落ち着いた響き、荘厳な響きが無限の高みから地上に降り、まもなく現れる太陽を出迎えるようだった。実際、森の上には、もう太陽の赤い緑が顔をのぞかせていた。生命の液体で満たされていた盃が上空でひっくり返り、その創造の力を惜しみなく地上にそいでいる。草原からは空に向けて、赤みを帯びた蒸気が香炉の煙のように立ち昇っている。岸辺の木々が、丘の裾から川にかけて、やわらかな緑の影を投げかけている。草の上には露が水銀のように光り、鳥たちが目ざめ、白いカモメが川の上を飛びまわっている。その白い影が、さまざまな色を映しだしている水面を滑る。太陽が少しずつ姿を現し、緑がかって青みを帯びた空へと昇っていく。それはまるで火の鳥のようで、上空で姿を消しつつある銀色の金星もまた鳥のように見えた。³⁰

ここに見られる、「太陽—光—生」が浸透して光景全体に満ちていくイメージ（朝の光による世界の活性化）、比喩による宗教的・伝統的コノテーション（「目も眩むばかりに」「銀の鐘の響き」「香炉の煙のように」「火の鳥」等）、動態性などは、この時期のゴーリキー、とりわけ『ルーシを巡りて』の風景描写の特徴である。

『ルーシを巡りて』は、1880年代末～1890年代初の放浪時代のゴーリキー自身の実体験や見聞に基づく諸短篇から成るが、連作としての構成には執筆当時の作者の世界観が反映している。まず題名が、1) 「ロシア」ではなく古称の「ルーシ」を用いていること、2) 「～を巡りて (по+与格)」という表現が宗教遍歴のコノテーションを持つことなどで、読者を聖者伝との連想に誘う。また、3) この連作を当初構成していた11篇のうち8篇が自然の風景描写によって始まっていること、³¹ 4) 苛酷な「今、ここ」で苦闘する人々を描いた個々の作品間に時空間や登場人物の共通性はないけれども、第1篇『人間の誕生』で始まり、第11篇『故人』で終わるその配列から、連作構成の

³⁰ ССТ. Том 11: Рассказы 1912-1917. М., 1951. С. 113-114.

³¹ 既刊のゴーリキー全集では、『ルーシを巡りて』は全28篇で構成されているが、第12篇『エラシ』以降の17篇は、この連作が最初の11篇によってまとめられた後の1915年末-1917年に書かれ、『ルーシを巡りて』には1923年の版で初めて追加されたものである。それらは1912-1913年に発表された第1-11篇に比べると分量も少なく、構成も緊密さを欠いて「スケッチ очерк」に近い。本稿の記述は、11編から成る『ルーシを巡りて』当初の構成を念頭に置いている。なお、この連作の成立過程と構成の変遷については、Тенишева. Е. А. Примечание к циклу «По Руси» // М. Горький. Собрание сочинений в 16 томах. Том 7. М., 1979. С. 363-397. に詳しい。

レベルでは、集団的身体としての「民衆」の一生が象徴的に示唆されている。

第7篇『女』には、第3節で言及した論考『個の破壊』との、とりわけ顕著な対応が認められる。たとえば『個の破壊』には「これは健康な者のごく自然な願望だが、私たちは人々を健康で、快活で、すばらしいものとして目にしたい」³² という一節があるが、『女』の語り手は、これと同じ構文を用いて、「私は生のすべてを、美しく誇り高いものとして目にしたいし、実際にもそのようなものにしたい」³³ と述べている。これらの記述の後には、前者では未来のプロレタリアートが組織的な集団性を獲得し、全人類を理性と美の世界へと加速させていくだろうとの確信の記述が、後者では逆に「実際の生はいつも、触れれば手が切れそうな鋭角の断面や、暗い陥穽や、みじめにうちひしがれた嘘つきどもばかりを見せつけてくる」³⁴ との「今、ここ」に対する幻滅の記述が続いている。後続の文章の対照性から見ても、『女』の語り手のこの感懐は、ゴースキーによる意識的でアイロニカルな自己引用だった可能性が高い。

また、『個の破壊』は、原初の人々が集団的創造力で作り出した神話的形象の代表的な例として風＝有翼のイメージを挙げているが（「目に見えない空気の動きが目に見える鳥の迅速な飛行に具現される」）³⁵ 『女』には次のような記述がある。

風は多翼の天使となって、大地を三日続けて駆り立てたすえに、濃い闇の中に追いやったのである。しっかりと食い入ってきたこの狭い暗黒の中で、大地は力なく、今にもその動きを永久に止めてしまいそうだった。そして、やはり疲れはてた風の方も、幾千ものその翼を力なくたたんでいた。天使たちの青や白や金色の羽根も折れ、血にまみれ、ほこりに重く覆われているように思われた。³⁶

この風の比喩はやや唐突な印象を読者に与えるが、ゴースキーは、たとえ強引であっても、原初の詩的想像力への接続を試みたのではないか。その他、作中に挿入されている「若書きの詩」（「私たちは皆、親しい大地によって／幸福のために生み出された！／大地がもっと美しくなるために／私たちは太陽からの賜物／この輝ける太陽の寺院で／私たちは神であり祭司だ／生は私たちによって創られる」）³⁷ は、明らかに戯

³² CCT. Том 24. С. 78.

³³ CCT. Том 11. С. 128. 『女』の日本語訳は以下、『二十六人の男と一人の女：ゴースキー傑作選』169-242頁に拠る。

³⁴ Там же.

³⁵ CCT. Том 24. С. 27.

³⁶ CCT. Том 11. С. 136.

³⁷ Там же. С.136-137.

曲『太陽の子ども』中のセリフを踏まえたものだ。このように、『汽船にて』や『女』には、生の起源としての太陽、エネルギー、集団的想像力への回帰、集団的身体としての民衆への憧憬、「太陽」と「民衆」の象徴的レベルでの結合など、1900年代半ばからのゴーリキーの詩学が顕示的に喚起されているのである。

5.

ところで『女』は、冒頭に風景描写が置かれている『ルーシを巡りて』中8編のうち1篇だが、1891年にゴーリキーが北カフカース地域を放浪した際の印象に基づいているはずのその記述からは、何か奇妙な印象を受ける。

風が大平原を吹きぬけ、カフカースの山々の岩肌を打つ。木もなくむき出しの峰はまるで巨大な帆のようで、大地が風を切って底なしの青い深淵を疾走していると思える。

[...] 巨大な雲塊の合間から、エリブルス山の双頭の頂と、その他の山々の陰しく水晶のような峰が、ときおり顔をのぞかせ、まばゆくきらめいている。山々は雲にしがみついで、引きとめようとしているかのようだ。空間の中を大地が疾駆していることがはっきりと感じられる。美しく愛しい大地とともに自分もまた飛んでいる事実への陶醉と緊張から、息をするのも苦しいほどだ。万年雪に光り輝くこれらの山々を見ていると、その向こうには果てしなく青い海が広がっていて、さらにその先にも、奇跡のようにまた別の大地が広がっていることを思わずにはいられない。そしてまたそれらの上方にただ青い空虚が広がっているということも……。その空虚の、ほとんど見えないほどのどこか遠くで、未知の惑星が——色とりどりの球体、われらが地球の血を分けた姉妹が回転しているに違いない。³⁸

カフカースは、19世紀のロシア文学において、崇高な自然の位相を強く付与されてきた伝統を持つトポスである。ゴーリキーは、一面では「巨大な雲塊」「エリブルス山の双頭の頂」「陰しく水晶のような峰」等、カフカースを表現する際の典型的なディテールを用い、伝統を踏襲している。

上記の引用部から奇妙な印象を受けるのは、このような伝統的な描写が、地球が無辺の空間を飛ぶという宇宙的なイメージへと直に飛躍しているためだ。これは、ロシアの大地を放浪している人間が、経験的に抱く感懐ではない。1891年当時の「私」のものという設定のこの記述には、実は19世紀末～20世紀初のロシアに知られていた天文学的知見や多様な思潮を受容した後の、執筆当時のゴーリキーの宇宙観が浸透し

³⁸ Там же. С. 124-125.

ているのである。

したがって私たちは、研究者の L. スピリドノワの表現を用いるなら、ゴーリキーの「1910年代の作品に顕著なコスミズムと神話的・詩学的な形象性への志向」³⁹の例をこの引用箇所に見ることができるのだが、ただし、それがはたして、スピリドノワが言うように「人間と宇宙の調和的な結合」⁴⁰の表現であるかどうかは、慎重に考えてみなければならない。

この記述に現れている宇宙観で際立っているのは、地球と宇宙のあいだが断絶することなく、連続していることである。語り手は、眼前の北カフカースの光景から宇宙の果ての惑星にまで一気に思いを馳せ、しかもそれが「未知」のものであるにもかかわらず、「われらが地球の血を分けた姉妹」であることを疑っていない。

ゴーリキーの全一的世界観（その代表的な形象が『天文学夜話』やエネルゲイアの教説をも踏まえた「生の源泉としての太陽」である）が、『女』という作品の構造の基底にあることは、「太陽がその光で抱擁し、やさしく愛撫して受胎させた大地を、宇宙という青い空間の中で運んでいるその美しさを語りたかった」⁴¹等の記述からも明らかである。だが、その全一性は「人間と宇宙の調和的な結合」と呼ぶことのできるものだろうか。

すでに指摘したように『女』との強い間テクスト性が認められる論考『個の破壊』には、次のような一節がある。

人類の生とは、創造——すなわち、死せる物質の抵抗に対する勝利への志向である。物質の秘密のすべてを支配し、その力を人間の幸福のために、人間の意志に奉仕させようとする願望である。私たちは、この目的に向け、成功のために、意識的かつ能動的な生ける精神物理学的エネルギーが世界内でたえず増大するようにと、細心の配慮を払わなければならない。⁴²

ゴーリキーの「全一的世界観」は、この一節に顕著に現れているような、「自然」に対する人間の支配の理想と矛盾しない。と言うよりも彼は、全一的な世界は自然の人間への従属、人間による自然の組織化によってこそ実現されると考えていたのである。

私たちはここで、「ソ連ロケット工学の父」であるとともに、ロシア・コスミズムの

³⁹ *Спиридонова Л. М. Горький: новый взгляд.* С. 217.

⁴⁰ Там же.

⁴¹ Там же. С. 136

⁴² ССТ. Том 24. С. 79.

代表的な思想家とも見なされているコンスタンチン・ツィオルコフスキー(1857-1935)の論考『宇宙の一元論』を思い出しても良いかもしれない。彼は「すべては連続しており、すべては単一である。[...] 数学的な意味では、全宇宙が生きている」⁴³、ただその意識や感覚の程度は周囲の環境によって異なるのであり、現在の宇宙に蔓延している無機物は、高等生物である人間による刺激で活性化し、有機物と化して生き始める時を待っているのだと考えていた。したがって、人間には太陽系や銀河系に入植し、「荒地や、十分に発達しきれなかった歪んだ世界に遭遇したならば、心に痛みを感じることなくこれを駆逐し、自分たちの世界に変える」⁴⁴ 使命がある、宇宙の物質の側もそれを待っているとツィオルコフスキーは言う。自然・宇宙に対する人間の優越と制覇を事実上の理想としていた点に、ゴーリキーとツィオルコフスキーの宇宙像の共通性を見ることができる。

ゴーリキーは、1923年11月6日付のロマン・ロラン宛の手紙で「人間については人間中心主義者(антропоцентрист), 自然描写については擬人論者(антропоморфенист)」と自己を定義している。⁴⁵ ゴーリキーの自然描写、とりわけ人間と自然や宇宙(太陽、月、星)との照応の記述の美しさはよく知られているが、それらは以下のような、冷静で合理的な考えに基づいていたのである。

人間中心主義と擬人的世界観は永遠に、世界と存在の意味を考えるうえでの基点であり続けるだろうと私には思える。これを回避しようとしても無駄なことだ。人間は長きにわたって、時間と空間のカテゴリーとまったく同じように、これらの思考形式の内に立てこもってきたからである。⁴⁶

想像力もまた、本質的には世界についての思考である。ただし、これは主としてイメージによる、「芸術的な」思考なのだ。そして想像力とは、自然の制御しがたい現象(стихийные явления природы)と事物に対して、人間的な性質や感情や、意志さえをも付与する能力である……。

言語芸術では擬人的世界観は不適切で、有害であるとすら考えている人々がいる。だが、こうした人々自身が、自然現象が私たちの道徳的評価に属するものではないにもかかわらず

⁴³ Циолковский К. Мониизм вселенной // Избранные произведения в двух томах. Том II. М., 2017. С. 113.

⁴⁴ Там же. С.125.

⁴⁵ Переписка А. М. Горького с зарубежными литераторами. М., 1960. С. 339.

⁴⁶ Архив Горького. Муратова. К. Д. М. Горький на Капри 1911-1913. С. 264. に拠る。

ず、「厳しい寒さが耳をひりひりさせる」「太陽が微笑んだ」[...] 等々と言わないわけにはいかないのである。⁴⁷

このような考えがゴーリキー文学の読者にあまり意識されることがないとすれば、それはその多くが作品世界内の語り手の立場から語られているためだ。上記の引用を考慮するなら、彼の作中の自然が人間に呼応してくれるのは、あくまでも擬人的な世界観に立つ作中人物の認識の枠内のことなのだ。その語りの外に位置するゴーリキー自身は擬人的自然観を、カントの批判哲学における「時間」と「空間」と同様、人間の認識を不可避的に規定している根本的なカテゴリーと見なし、そのような人間の認識を超えて在る「自然それ自体」を冷徹に見据えていたのである。

6.

前節でツィオルコフスキーとゴーリキーの宇宙像の類似について述べたが、ロシア・コスミズムの代表的な思想家と言えばニコライ・フョードロフ（1829-1903）である。「私たちの共通の敵、[...] 唯一の敵であり、われわれの内外の至るところに常に存在しているもの、にもかかわらず実は一時的な敵であるもの——それは、自然である」。⁴⁸ 合目的性を持たない自然を「敵」と呼び、その最も凝縮した現れである「死」を原罪と見なして（誕生とは、父祖から生命を受け取ることであり、また父祖から生命を奪うことである）⁴⁹、死者を復活させることでこれに打ち克ち、不死の人類が生領域を無限に拡大することを「共同事業」と名づけたフョードロフの思想は、ドストエフスキーやトルストイをも含む多くの人々に影響を与えた。

『ルーシを巡りて』には、このフョードロフの思想を思わせる場面がある。第11篇『故人』の末尾近くで、遺体を前に眠り込んでしまった語り手が見た夢の記述である。

乾いた香しい草に囲まれて、私は、まどろみのとばりの向こうに彼の暗く謎めいた顔を見、死せるものを生けるものと化すためにはどうしたら良いか心に砕きながら、地上のわが道を幾千度となく通り過ぎた人のことを思った。奇妙な光景が浮かんできた。ひとけなく、むき出しの平原を、千の手を持つ巨大な人間が弧を描いて歩き、その弧をしだいに広げて

⁴⁷ Горький М. О том, как я учился писать. // ССТ. Том 24: статьи, речи и приветствия 1907-1928. М., 1953. С. 469-470.

⁴⁸ スヴェトラナ・セミョーノヴァ（安岡治子・亀山郁夫訳）『フョードロフ伝』水声社、1998年、171頁。

⁴⁹ 同上、213頁。

いる。彼が歩いたその足もとから、死んでいた平原がよみがえり、風に揺れる、みずみずしい野草に覆われていく。そしてその上に村や街がどんどん育っていくのだが、巨大な人間は、生けるもの、みずからのもの、人間的なものを倦むことなく播きながら、大地の端まで歩み続ける。大地のすべての人間のことが、敬意を込めた慕わしさで思われる。人間は皆、自分の中に生きている神秘の力でもって、妥協することなく、永遠に、死せるものを生けるものと化し、死に打ち克つ使命を担っている。人間は皆、死の道を通って不死へと向かう。死の影は人々を呑み込もうとするが、どうしてもそれができない。[…]⁵⁰

「千の手を持つ巨大な人間」は、集団的身体としての民衆の象徴的な表象だろう。彼が踏みしめた場所では「死」が「生」に転じ、「人間的なもの」が広がっていくという夢。連作としての『ルーシを巡りて』が、象徴的なレベルで集団的身体としての民衆の誕生から死までを表していることを先に指摘したが、「死」に相当する最後の短篇『故人』の終わり近くにこのようなイメージが挿入されることで、民衆が集団性を帯び、不死となって生の領域を無限に拡張していくべき理想も示唆されているのである。

「死せるものを生けるものと化すためにはどうしたら良かに心を砕きながら、地上のわが道を幾千度となく通り過ぎた人」には、あるいはフォードロフの面影もあるだろうか。ゴーリキーは、生前のフォードロフとのあいだに直接の親交はなかったが、彼についての見解をトルストイから聞いたことがあると回想しているので、少なくとも間接的には、1900年代のうちに、その思想を知っていたと思われる。ただし研究者のS. スヒフは、ゴーリキーの書簡や論文の記述から見て、彼がフォードロフの著作を実際に読んだのは、1910年代末以降だろうと推定している。⁵¹

ゴーリキーは、ツィオルコフスキーとは1920年代の半ばから手紙や著書のやり取りをしており、その業績を高く評価していた。ゴーリキーの蔵書にはツィオルコフスキーの著書が27冊あり、そのうち『宇宙の一元論』を含む3冊にはゴーリキー自身の書き込みが多数あるとのことだ。ただし、1900～1910年代にゴーリキーがツィオルコフスキーの仕事を知っていたかどうかは、確定できていない。研究者のG. メンデレーヴィチは、ゴーリキーが1903年に『科学展望』誌に協力していた時、この雑誌に掲載されたツィオルコフスキーの論文「反作用機器による世界空間の研究」を読んでいたのではないかと述べているが、あくまでも推測に留まっている。⁵²

⁵⁰ ССТ. Том 11. С. 224.

⁵¹ Сухих. С. И. М. Горький и Н. Ф. Федоров. // Русская литература. 1980. № 1. С. 160-168.

⁵² Менделевич Г. А. Циолковский и Горький. // Труды Четвертых Чтений, посвященных разработке научного наследия и развитию идей К.Э. Циолковского (Калуга, 17–19 сентября 1969 г.). М., 1970.

このように、1900～1910年代のゴーリキーとロシア・コスミズムを代表する2人の思想家との直接の接点は見つけられていない。だが、フォードロフが多くの作家の関心を惹いていた時代、ツィオルコフスキーの宇宙的想像力を生んだ1900～1910年代の空気をゴーリキーもまた呼吸していたこと、彼がコスミズミ的な思考の近くに位置していたことは確かである。

ところで、フォードロフやツィオルコフスキーに対する高い評価がゴーリキーの言説に見られるようになるのは、彼がソ連文学の正統な権威となっていく1920年代後半からである。ソ連文学には一貫して、果たし得ない全一性への希求が潜在的に流れしており、それは自然と人間の関係について微妙な修正を見せながらも、建神論やコスミズムの思想の延長線上にあったのだと私は考えているが、「社会主義リアリズムの提唱者」ゴーリキーは明らかに、この流れの結節点のひとつでもあったのだ。

Структура мира и вселенной в дискурсах М. Горького в контексте 1900-х и 1910-х годов

НАКАМУРА Тадаши

В этой статье исследуют «влияние» достижения астрономии, православной догмы «энергейя», коллективизма, богостроительства и также, хотя косвенно, русского космизма на мировоззрение М. Горького в 1900-х и 1910-х годах. В статье также рассматривают их отражения в его произведениях этого периода: «Детях солнца», «Матери», «Разрушении личности», рассказах, принадлежащих циклу «По Руси», и других дискурсах. В итоге мы выдвигаем гипотезу, что инициатор соцреализма Горький и явился одним из промежуточных пунктов, связавших вышенаписанные мистические течения Серебрянного века с Советской литературой.

C. 52–59. [<http://www.gmik.ru/2017/09/27/tsiolkovskiy-i-gorkiy/>] (2019年9月13日閲覧) に拠る。